

# 第63回

## 『骨まで愛して』の陰にあった 兄弟の樺太への思い

終戦後、樺太（サハリン）から内地に引き揚げてきた旧住民は4万人以上いたとされています。その中に、戦争で父を亡くした菊地姓を名乗る兄弟がいました。まだ10代だった昭和23年、彼らは室蘭にわたります。

さまざまな労苦と経験を積み、やがて上京。音楽の才に恵まれた兄・正巳はその道に進み、昭和35年、「北原じゅん」の名で自ら作詞作曲した歌をカントリー&ウエスタンバンドのリードボーカリストになっていた弟・正規に提供、陰から支えます。

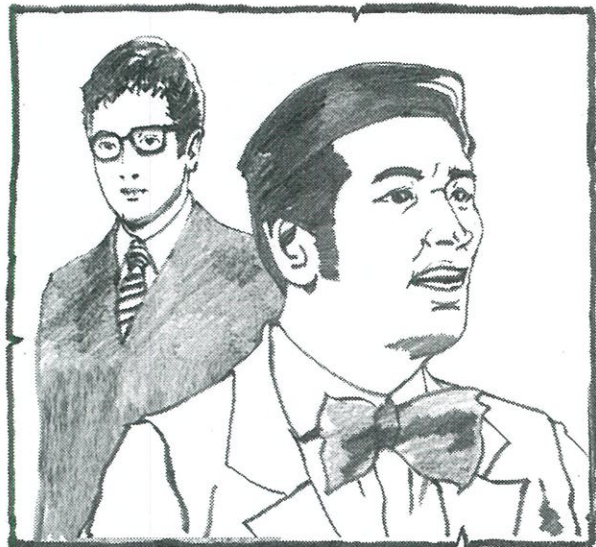
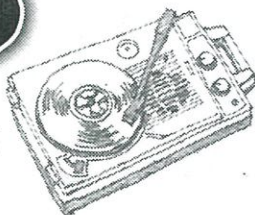
弟は芸名・菊地正夫を名乗り、『スタコイ東京』（ひとりぼっちで）とのカップリング）でデビューを飾り、兄は続いて『ふるさと』は宗谷の果てに』という兄弟二人の望郷の念を綴った歌を作詞作曲、弟に贈りますが、あいにくヒットには結びつかず、3年後、弟は在籍していたティチレコードを離れ、東芝レコードに移ります（その後『ふるさと』は、北原の秘蔵っ子、西郷輝彦が『涙になりに』のB面に収録して、少しは知られる

ようになりました。レコード会社を変えても芽の出ない弟は改名を決意して勝負を賭けま

### 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵・松本浦



すが、再デビューにあたり再び親族が支えます。菊地兄弟の叔母が作詞家・川内康範の当時の妻だったことから、新曲の作詞を川内に依頼、曲は北原がレコード会社の枠を超える仕事のため「文（ぶん）れいじ」というもう一つの筆名で担当、家族・血縁の情を大事にする川内はこの時、あえて妻の名である「川内和子」を筆名として掲げます。こうして完成された『骨まで愛して』を引っさげ、昭和41年1月、弟は「城卓矢」として再デビュー、その後の状況を書く必要がないくらいの大ヒットになったことは多くの人の知るところです。

私は当時、中学2年、美樹克彦の『俺の涙は俺がふく』『回転禁止の青春さ』（両曲とも北原じゅん作曲）など、エレキギターのグリッサンド（例のテケテケテケです）を伴奏に取り入れたリズム歌謡をお気に入りにしていました。『骨まで愛して』、骨まで〜と歌われるスポットCMが、ラジオから絶え間なく流れていたことを思い出します。

「北の雪原」がイメージされる筆名「北原じゅん」ですが、その後、GS時代の昭和43年には『サハリンの灯は消えず』（歌・ザ・ジェノバ）を作曲（作詞は知人の若木香に依頼）、樺太への郷愁が決して失われていない気概を示した何よりの証でしょう。

さらに北原は、川内父娘が監修・企画し、昭和50年から始まったテレビアニメ『まんが日本昔ばなし』の音楽を担当、日本人の心のふるさとである昔話の世界に、自らの郷愁を重ねて創作していたのかもしれない。一昨年、鬼籍に入った北原ですが、今頃は兄弟二人で、故郷・樺太の地を空から懐かしく見つめていることでしょう。享年87でした。